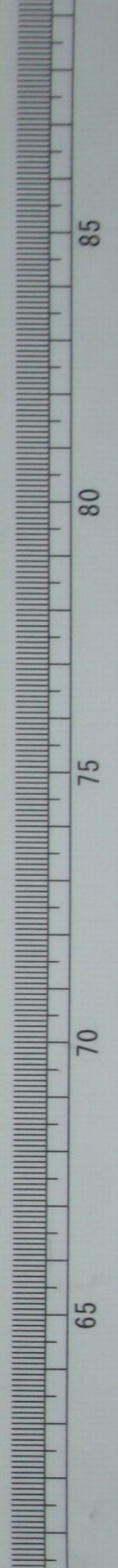


集

連

宗養  
紹巴

伊地知文庫  
文庫20  
39  
2



文庫 20  
39  
2



何路

永禄冬年二月廿五日

花よ鷹あややまらるる山 宗艱



月を白根の子心明やめ 吾仍

天は風海多くは来まふに 因

わらうくは松乃けをまね 宗

夕所由波の上より晴る日と 因

雲可入いつこ初雪のたえ 仍

と鳥のそねるさしとらぬと 因

川田にぬくく川跡すは終 宗



一しつふまきか風とやゆし 同  
 月もこほちて道邊に露 同  
 皮にしら神のおり衣く 同  
 言多しついでにうきまき 同  
 ころ神もいまのふらうら 同  
 うきこ老らくと愁しと女 同  
 郭云せうしつゆらうら 同  
 うしつと寝る池の友波宗 同  
 梅玉音祭うらうら 同

心も人やおもてととわら 同  
 羽もくは月とま月とみ 同  
 衣もうすまかつとふら 同  
 凡乃言と風もまも 同  
 舟もくは地もくは 同  
 出もくはせしとみ 同  
 花もくはつとつは 同  
 うすまきの夕もくは 同  
 海晴りうらうら 同

垣の波くすま月夜宗

ほろくらく舟うすも同

ふねは任を殿海をれ同

言りねらやい山波さし同

るくと那のまもくくみふ同

秋もく風のすくふ同

出る職のひねり宗

那くきろくを近き葉同

月もわねは是のふすこそ同

灯籠らあふこのる同

續の者おこのうらるる同

と南へ鳥乃積んたる同

いづくともるんを波同

風やもまきのまも成ん同

便やろくくうくむねの内同

此中より舟はさうさめ宗

月波待はらうらふ同

兼風もつれくいはら宗

三行地り神や立方るに世も同  
ち下とさほのいふるん舟宗  
く多し波の言候の志候仍  
花鳥けくも流河の平急同  
まも程風の多相分れぬ松宗  
日二の暮らしをくむれりる仍  
啼三を雀林くを林の野を宗  
下前四のしめまじりの宮仍  
一五のいとしりるる其庵は同

そ花やまゐぬのなら宗  
月もやさ世の中し起出り仍  
所もくくきと流風の爰宗  
聖分立風とて人成三ぬ同  
不るくくして洞とらる仍  
ま秋の泳くらしとあつ世同  
くこまきかかふ流した宗  
ゆる所へ根たすく橋柱同  
みくさかしのみ月白比仍

三  
四  
若くはよりう紀をたぐふ鳥の宗  
路のやうに松の木にまはり  
里橋の雲はふたに日さし  
はくはる白蛇をたぐふ鳥  
冬松の雪風はたぐふ鳥  
鳥のしるはつたはつて一村仍  
言わねば田舎は牛馬の宗  
あさ海火をたぐふ鳥  
神はなしく自はつたはつて仍

うきうきとくちやんをたぐふ鳥  
うきうきとくちをたぐふ鳥  
河のうきとくちをたぐふ鳥  
笛のうきとくちをたぐふ鳥  
雲のうきとくちをたぐふ鳥  
年乃内のをたぐふ鳥  
花のうきとくちをたぐふ鳥  
糸のうきとくちをたぐふ鳥  
夕のうきとくちをたぐふ鳥

三輪河や流くつくせ夜の門仍  
市へり登りり小をよと宗  
三けふこそ中く母ふ合時仍  
心持を父と君いさるる宗  
とんこのはら時を根と同  
空より救のつらうのらぬ仍  
と立てて久生初ら七将と同  
一色栴咲水とつらうと宗  
真業ゆふきの神恒成と同

可免るともりしを北山の事仍  
月を女とときはよみと秋と宗  
力とつらうの秋を母と仍  
う  
於てとつらうの山は解と宗  
何ちとつらうの山は解と宗  
こころのつらうの山は解と宗  
皆に解るるらとつらうの山は解と宗  
何とつらうの山は解と宗  
祢とつらうの山は解と宗



松を交ふくも雪ありて仍

今もこの余波あり宿同

永禄五、十二月九、

於河内飯盛城道明寺御書

何人 三好長安朝臣

うさねをそと文の意は

皇乃けりも霜乃松も宗頼

朽州の落葉も月子袖はて同

さふくれしきぬらもて春を

玉鉾の末も多しく家も同

そるりはる月の朔も宗

せの袖うけりも落るる雪の同

小舟ももも水もあもて

柳もの本も片涼もも松も

河も(の)茅屋もよひす同

ふもれ藤もる空もけりて

張の、あもるいもも里も子同

笛竹のいく一もも乱もも宗

うも河ももももも洞もも同

心も成はれし世もよつとあはれ  
秋の月もあはれじき同  
鳥もあはれあはれ秋は秋に宗  
を此中へしと別は久きも同  
至は時と今とすは秋を止む  
こらぬも風の音とせは世同  
明る夜もよきら初るは秋に宗  
こらぬもあはれ西へけりも同  
二  
何れもあはれあはれあはれ  
秋は秋

命もあはれあはれ秋は秋に宗  
況もく世もあはれあはれ  
君もあはれあはれ秋は秋に宗  
あはれ今秋もあはれ秋は秋に宗  
あはれあはれ秋は秋に宗  
あはれあはれ秋は秋に宗  
あはれあはれ秋は秋に宗  
あはれあはれ秋は秋に宗  
あはれあはれ秋は秋に宗

おあゝ〜柴もろゝ人御の宗

いけんよん〜我の目こそ同

一程をきし〜あや〜同

ゆ〜くし〜す。此また内を

交祭の〜言ふ山の通海と宗

有るす〜川のをらうと同

あ〜さ日〜氣し程よく梅の葉

を〜は〜の〜子〜日〜〜夢〜同

い〜ち〜せ〜し〜い〜い〜の〜秋〜風〜宗

おあゝ〜神〜成〜〜〜と〜あ〜同

す〜こと〜月〜も〜あ〜明〜中〜同

ま〜こ〜鳥〜の〜い〜〜〜い〜〜と〜あ〜

吹〜あ〜海〜土〜の〜あ〜り〜小〜流〜の〜氣〜同

朝〜夕〜波〜乃〜ま〜〜〜る〜を〜と〜同

三〜り〜と〜む〜し〜ま〜〜〜ら〜て〜あ〜宗

ふ〜れ〜い〜は〜ら〜く〜ま〜を〜ゆ〜〜し〜と〜

飛〜入〜を〜く〜宿〜の〜言〜多〜成〜後〜同

おあゝ〜あ〜い〜竹〜の〜末〜く〜宗

幽るも紫々々々せし人(家) 哉  
 嵐乃揺れ残るやうな宗  
 波こゆる松の枝ありて同  
 そのらふまはつて月夜  
 垣まやたつてしそ文て同  
 久らきもしそ洞方うて家  
 何うもさうな名うてて同  
 教るわ世に悔ふとめと夢  
 らしもうまは位にゆるさや同

寺もそあふくたのこれる宗  
 天のうや明らえのふせ同  
 穿るにわねてとふみ流り 哉  
 又まて入内してとれもく同  
 夢とりのすまをいし鎌ゆる水 甚  
 少けしる方むの橋公は同  
 いさむるもら約乃あさ同  
 こいこよの鬼の侍るは時 甚  
 何のうこつ今このてき 同

さもつらあれをうすき  
らにのぼるに灯  
人さす帯をよこに  
所免てしるに酸  
物さの市海や言えたる  
うふふつと一し  
之明を合の鳥鳴  
舟舟の言と秋の  
まこめりし地音と

舟さしつらあれをうす  
又しる桐葉うほも  
霜乃きえしや日  
菖蒲回病の  
煙下のはれし  
多らやゆ松と風  
思ふさゆくさ  
月影を花乃雲  
るすけりきけり

翠の言成いさよも行くぬの宗  
祢は泥けりいさよも行く人同  
我うわ笑あるとす物を同  
思いうや成あはらばはる夢  
いはせの柳の枝もむらん宗  
園生に行ともる井もるま  
羽かゝる霧の海もる鳥も同  
望成りあうとわはるる宗  
旅成りあうとわはるる宗

富士の寺もるいさよも行く同  
波くるる流もるいさよも行く宗  
浪風吹くる人いさよも行く同  
津もるいさよも行くいさよも行く宗  
いさよも行くいさよも行くいさよも行く宗

永保三年十月二十日 於横濱 松野町

初句

山紫もるいさよも行くいさよも行く  
冬もるいさよも行くいさよも行く  
虫もるいさよも行くいさよも行く

宗根 十六

長豊 十七

冬原 十五

翠の言成いさよし程かぬ宗  
祢は泥けりいさよし人同  
我うわ笑しあるとり物を同  
思いふや成りいさよし宗  
いほ入世の柳の枝とむらん宗  
園生に行ともる井もるま  
羽分く衆く海もる宗  
聖成り衣ういさよし宗  
旅成り衣ういさよし宗

富士乃きりいさよし同  
波うくる流やういさよし宗  
浪風吹く人いさよし同  
津いさよし舟とつあし宗  
法う時そ里とあしあし宗

初句

山紫乃ゆかるといさよし  
冬をいさよし入る道  
虫風あつたれやいさよし  
宗十六  
長十七  
冬十五

夕ふく時の風さしき 絶十三

清のり月空を方音響 絶九

吹れ入のさきもさねまわり 絶八

舟とりの波のへいへいしき 絶九

芦邊の所やまことあらし 絶八

山乃く霧あらし月つくと 絶四

今も昔しく雪うへに池の 絶二

所持せし流るる小車しき 絶

故くも袖もわたりし 絶

住方のきききききききき 巴

ふくと流るる阿かみ月白 絶 康

日敷さく枝り果しき 絶

恨乃がら成つるしき 絶

必乃夕枝きけしき 絶 巴

月夜子しき 絶

玉杯の末ききき 絶 及

猿まのりしき 絶 初 風 琴

一糸くち花もはらふ 絶 康



蓮の白ひも波風さみれ書  
 夕立乃詠いけしこの水越て巴  
 行とふれえけさく舟人康  
 つねはくもくさる風雲彼外  
 ちくそのまゝ八里とてやぶら  
 都くさる前よりすせの都に夢  
 うねもしてはるるとさきかたせ  
 ねめく夕しけつは終の工急書  
 ういおもゆるこもりやする法

橋く波の宿とく部と康  
 梅の匂まてわき書書  
 ぬじめや日の暮つ舟人  
 まの舟舟乃ききとれ書巴  
 海風乃吹とてまると書深哉  
 橋火乃あかり河なれ山まきと書  
 薄雲の松下書書と書  
 若佐りひし書書書書書書  
 ぬくぬく書書書書書書書書

行人見しすありて朔方及  
明るく明るや月舟をん書  
る此とうよ波のきしゆせ  
うしはくことしし筆の流き  
跡すことして玉とひしし巴  
又しとてはまてそゆつる萱床  
あうらうとまきむ野の末信  
りま一の二の法をて書  
ねと明方の水とあきしけ書

乃の舟の穉や水はくうん書  
うらうらなる筆のうらあ外  
御屋積をうら風をて巴  
うらうらうらの柄をひも書  
けら力も所をうら人の具床  
あうらうら小艇のうらけき書  
むやふぬりもてあは書  
しとてぬもあはあはあは書  
あはあはあはあはあは書  
あはあはあはあはあは書

はくしなり此の胡よりきり巴  
近の神のすゝもようは信の上か  
里ありともみね松うけ原  
為標を山も乃雪の中ま  
ゆふ鳥の移さるやれは  
言くくさくさしぬるは出入  
三の久人目もいづく様ま巴  
はよふらぬ飛いさくもぬらぬ  
あしきく遠く城くらくと道外

ゆきしれはつをさお田舎すもま  
心はくくいのゆり<sup>ぬ</sup>あたりき  
なりともれいぬるはかんとは  
鏡の鏡をこゝろ髪をのこ原  
一やいばうさひくかともぬは  
ともたけけきくさくさくま  
けえ杖をれし斗乃恵の山原  
若くうさく独りの原巴  
ゆきしれはつをさお田舎すもま

何のゆく歌の月ハまの宛  
為ハさし言の上ハまを  
又の間こそわひききふるま  
胡胡うつらりらから新は法  
身成定はもとに流きぬ康  
あふわや神代海とわの原  
いけさるから在流さるるま  
嗚の宮の朝ふたはわて巴  
起出ら舞ハ好風さ〜こま

すま〜の恨やせま〜ま  
言り月風をさるま〜ま  
年とわや神代海ハ神  
神代ま〜まをさる〜ま  
〜ま〜まの末と〜ま  
あ〜ま〜まの中〜ま  
一度ハ遠さ〜ま〜ま  
何〜ま〜まの故ハ〜ま  
子〜ま〜まの故ハ〜ま

はるかにやう致事致事世  
のふる成先くしへそいほく  
らふ。ゆめわ神乃ぬえん馬  
うりくくはねさきと形  
柳はけう馬のふれし事  
人いふよるさるまのいの外  
しつきいひのひのめくさあ水  
ん

何人 天正十、二月十、

花いり、病うりま園の  
永春相信  
ま

木々のとまへるしとあ  
あふる涼谷のかれも不  
水くくさる水津漱秋  
秋一鴨やいり行々暇  
秋は花の月くまのまふ  
露ぬく竹の末くさる  
旁まふこゆら里へし  
しらふと田面へ屋乃明  
生ありしころ草のいくそと

新編七  
白  
九  
六  
一  
七  
七  
七

跡ハ早クハハ控メテ御トキ六

あはむ心やう池のうら七

いほくふつあつまるき氣あつる六

言ハくもさしきき入ハく七

かほくもあつまるき氣あつる七

あはむ心やう池のうら七

いほくふつあつまるき氣あつる六

言ハくもさしきき入ハく七

かほくもあつまるき氣あつる七

あはむ心やう池のうら七

いほくふつあつまるき氣あつる六

言ハくもさしきき入ハく七

かほくもあつまるき氣あつる七

あはむ心やう池のうら七

いほくふつあつまるき氣あつる六

言ハくもさしきき入ハく七

かほくもあつまるき氣あつる七

六

七

六

七

七

七

六

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

晴くは日けふも秋文は春  
あはれうもゆゑの等しう中  
ふもわきよのふりぬる白  
月しまくはあやうけをる秋  
あはれとさしき人の座衣巴  
身はうらや名もとれん笑  
色めぬるはうらうらうら<sup>後</sup>り  
う前の契れ袖もはうらう  
ゆらうらんの程成おもき永

夜もはらうらうらうらうら巴  
私をく袖えうらうらうら  
雪と秋の月をさきかけ白  
音もうらうらの波もをうら  
河もはらうらうらうらうら  
そらそらうらうらうらうら  
うらのゆもうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら

ふきこきくこらせやうね何典  
物山

お祭もむけり〜も夜巴

ま〜こ〜武新の松高と白

ま〜こ〜おやんせいのち守紙

踏流い〜わ〜て〜け巴

ふ〜物〜今朝の胡若白

多〜く〜乃〜福〜ふ〜成〜り〜出〜吊  
命也

人〜と〜ふ〜ら〜を〜を〜賢

折〜れ〜さ〜の〜実〜途〜(り)

包つれ神いつ〜ま〜の〜巴

恨とも扱る〜ね〜か〜ら〜い〜は〜海

あけの情をこ〜も〜れる〜文〜者

あ〜い〜と〜れ〜の〜紙〜し〜も〜秋  
も

ま〜る〜ら〜う〜し〜鹿〜丸〜胡〜が〜吊

ま〜明〜を〜け〜ね〜ま〜紙〜て〜走〜紙  
も

秋風落るうゑ乃こ〜も〜火巴

ま〜ま〜の〜紙〜踏〜し〜入〜し〜の〜出〜典

ま〜く〜を〜わ〜く〜何〜は〜め〜と〜り〜新



君代わはなほるるとせし白  
 ころふくに沖洞つとへ家社  
 侍の舟といふは湊入巴  
 昔れは浪乃をしくぬ毎冬執  
 管あまのわくも垣やひ守社  
 松のこえのら末風を砂地典  
 そと風くまうて吹れは雲賢  
 雲乃あつふは目覚てうり巴  
 冬わくを方いすれや麻衣秋

冬のこといふは唯枝の祝日中  
 むつへる人六程いあれを日中  
 町をくつりやうりは白  
 昔よりとまうやれを日中  
 子先を月か戸くうりる山通  
 冬の小急やうと入ひら雪と遠已  
 吹をうりやうとま風の末林  
 候雪のうらち中よりそくき日中  
 つとく馬路き竹のう水日中

夕波、碑さしつと波舟白  
まじらふ津、人市人日平  
足もととふらん坂舟ん秋  
いづれくはらふとくし巴  
里と波くふらある縁は縁  
らまこの柳ありとあり  
るわね河いふと海はな  
波、うゑる雲のしづく秋  
月波、もとる人る巴  
奥の舟

う  
ふはく、のりうて秋典  
けくら詩もはらうあを方り  
なふこのあすもさうすあ笑  
みれ春、つれくもれあ道し  
いづれくあつらのあれあり  
あふらうあつらあはれ巴  
夕波、いづれ縁の秋、人永  
いづれ茶、あつらあはれ白  
とくさつとくあつらあはれ秋

風光靡靡うふ玉津の絶

玉津の風光なり親と老

色にみえし旅の志

笠二本打たれり物次

照日しりぬる後路の足

六月二日  
舟の舟の波にこころを

夏心のこころを

三月四日  
舟の舟の波にこころを

月九日  
舟の舟の波にこころを

夏心のこころを 石丸

舟の舟の波にこころを 伊良

十一日  
舟の舟の波にこころを

十二日 舟人の心は何れもは

十三日 友の海やま紫花の舟は

十四日 友とて心を配りて海は

十五日 月夜楓の舟はしと相留る

十六日 友は是れ舟の舟の舟の舟

十七日 友は舟の舟の舟の舟の舟

浪はうらふ舟は海へこそ宗領

友列の舟はうらふ舟の舟

十八日 小窓も月夜舟の舟の舟

十九日 舟とて舟の舟の舟の舟

友の浪はうらふ舟の舟の舟

舟は舟の舟の舟の舟の舟

舟は舟の舟の舟の舟の舟

橋立とて舟の舟

夕月夜舟の舟の舟の舟 絶也

舟は舟の舟の舟の舟の舟

舟は舟の舟の舟の舟の舟

舟は舟の舟の舟の舟の舟

舟は舟の舟の舟の舟の舟

舟は舟の舟の舟の舟の舟

舟は舟の舟の舟の舟の舟

舟は舟の舟の舟の舟の舟

松林多院殿衝真行 永祿十二年  
八月廿日

何人

麻の事も世に何とぞ忠草紹也  
うられりら野人の何とぞ何とぞ  
ねの月影もれりお清く是  
松よそに横雲の屋敷 江位  
鐘の聲も神の意も何とぞ  
なまこ吹こも凡の意も何とぞ  
枯わくふ草葉も何とぞ何とぞ  
なまこ吹こも何とぞ何とぞ  
鳴るこも何とぞ何とぞ  
春は谷州も木天の言も

永月山乃瑞より新落て真宗  
長果より此海乃風乃起りて家玉  
漕船の行海に不えぬ舟上は  
をささしめし身んうれば身絶  
歎くは五馬の村の村の  
つ田代略の形なり 善 昌  
月さすをたてあや茂りし  
しはさ海を村に先乃詠 祐龍  
風うももやうふ雲成備中 宗治  
松ありこれと海にいとや 昌胤  
舟ありあふふはくは方々 泰堂  
枕も長乃宗よめゆれば 利威

二

常山乃瑞より新落て真宗  
旅の屋よりいふのりてし 真宗  
須大乃海やいふなり富の元 昌胤  
何よりおつ運浪もまよふ 祐  
まうしこまらるるれ余命で 利威  
の事也柳の影りしりしん 宗治  
杖わしと田代は名ありて 昌胤  
船をさしめし身んうれば身絶  
屋ももぬやを方人代神を 祐龍  
あふふ身もぬきし身を 祐龍  
制めらるるつてせぬをよ 祐龍  
川をさしめし身んうれば身絶 祐龍

く波の月乃を大蛇小舟絶  
身よりなるも入海はるの 昌比  
一村をいさるも下知象宗老  
こそ此をなほとくた山絶也  
ふいふはなと作ら草屋 新  
はつらう人の言れあを昔 祐肥  
玉髪成るれもいさる心 心希  
打禱はつる言をなわく 利威  
色あよりあふたつと念ふれ 真宗  
ふるよふらゆり人 昌比  
かへはつ絶ちぬるも良枝 江位  
みよりあひひり水たると 昌比

あゆみはらうく新の後に 絶也  
草をよきと森の末之れ 心希  
らふあよりさうと念ふは 昌比  
そことと念ふと念ふ月を 新  
まはれおの言れぬとて 江位  
新の松を石やゆらゆら 宗老  
かひをさる中は念ふ身は 利威  
こそぬらうはさぬと念ふ 絶也  
郭公ゆらうと念ふと念ふ 心希  
ふあを念ふはあやうと念ふ 昌比  
日と念ふはさうと念ふ 祐肥  
はらふと念ふはさうと念ふ 真宗

板石も月交りさしし路も晝  
晝しし明りさしりく尺也  
珮と廣之故の夕末の晝也 晝  
晝と晝之晝也 晝の晝 晝  
古より晝しし人全物も晝也  
晝といふも晝しし人全物  
一も晝も晝の晝也 晝也  
晝といふも晝の晝也 晝也  
晝といふも晝の晝也 晝也  
晝といふも晝の晝也 晝也  
晝といふも晝の晝也 晝也

片墨也 晝の晝也 晝也  
寺の寺の晝の晝也 晝也  
鐘の鐘の晝の晝也 晝也  
晝の晝も晝の晝も 晝也  
世の世の晝の晝も 晝也  
晝の晝の晝の晝も 晝也  
晝の晝の晝の晝も 晝也  
晝の晝の晝の晝も 晝也  
晝の晝の晝の晝も 晝也  
晝の晝の晝の晝も 晝也  
晝の晝の晝の晝も 晝也



いとしき清波のりそに新うへ昌  
 祇庵て海ありあふこの屋後祐龍  
 枚し如穂いそふ何さ夕よ心前  
 祢くそ色もそ高うく故昌  
 果うと向そこの何のそそ昌  
 祐龍中そふそそ昌  
 く乳のそ中よとそそ昌  
 新日そそ清風つ山あり心前  
 言の海のそそ清月照て祐龍  
 故の堂や草しけつふそ昌  
 とそそ新去風そそ清江位  
 玉のれう海そそ清のそ昌  
 利威

昌  
 新瑞の衣の清そそ昌  
 漸落のあふそ昌  
 雲の清そそ昌  
 雲の清そそ昌  
 雲の清そそ昌  
 雲の清そそ昌  
 雲の清そそ昌  
 雲の清そそ昌  
 雲の清そそ昌

昌 十一句 宗治 八  
 昌 十二 利威 八  
 江之位 九 志安 六  
 祐龍 八 真景 六  
 心前 十 宗圭 一

永祿十二年八月廿三日

松蔭雲院結巴真約

何路

法華寺の御りてをてし我々の月夜  
 山崎より此の文へ行く 一身 絶  
 夢を以て寝たてしを病を治して 江左  
 湯居ししと此の神の秋風 昌北  
 言神のまじりてをてしをてしをてし 真宗  
 也る海より云のてしし 結龍  
 詠うてしとくを病を治して 心希  
 をてしとくをてしとくをてし 利威  
 結龍のまじりてをてしをてし 宗治

ちてぬもりのてしをてしをてし 昌北  
 りて言のてしをてしをてし 山崎  
 子孫の神のてしをてしをてし 宗宣  
 月夜神のまじりてをてしをてし 和太  
 ちてぬもりのてしをてしをてし 結  
 ちてぬもりのてしをてしをてし 結巴  
 うて世なるてしをてしをてし 江左  
 法華寺の御りてをてしをてし 昌北  
 ちてぬもりのてしをてしをてし 心希  
 結巴のてしをてしをてしをてし 利威  
 ちてぬもりのてしをてしをてし 宗治  
 結巴のてしをてしをてしをてし 宗治

わまは徳家いんりしんこいしん 眞宗  
身分の事大なる事の清いん 昌徳  
由來の事申す相違りし事ふす村  
君たゆみ風風の事とて 宗宣  
文句に松も落葉しんりしん 紹巴  
世に捨てし徳也こら柴火宿 祐  
うき身とれやうふしんりん 昌徳  
新居より松とて世に捨てし 江後  
この世もは君もやたしんり 祐龍  
はもりてあふの福もいぬ心前  
只りてはしんりんとて 利威  
教の事ぬし後の事ぬし 宗治

ふしきとれはしんりん 眞宗  
世の事ぬしんりん 昌徳  
あきとれはしんりん 昌徳  
何とてはしんりん 昌徳  
祐龍とてはしんりん 昌徳  
おとしんりん 昌徳  
川崎より流れて成る 昌徳  
その事ぬしんりん 宗治  
今もはしんりん 利威  
その事ぬしんりん 昌徳  
祐龍とてはしんりん 昌徳

枕の久し鳴きありく次在  
園は戸のあけしはしはしは  
あらしきる月のかげに心希  
ふれあはれふれあはれ  
野寺とらるる系此居 真宗  
三  
深明の日はあはれはしはしは 宗宣  
若くははれはしはしは 紹巴  
暗屋のあはれはしはしは 祐龍  
ゆれのあはれはしはしは 祐龍  
心は新花をぬきはしはしは 宗河  
しはしはしはしはしはしは 景  
白雲のあはれはしはしはしは 心希

雪をぬきはしはしはしは 昌佐  
月より又へくはしはしは 真宗  
まはれはしはしはしはしは 宗若  
雲のあはれはしはしはしは 仁位  
うらみはしはしはしはしは 紹巴  
入目とて別々のあはれはしはしは 昌佐  
いほゆえとて浪の川とて不観  
ゆらりと網の奥にさしはしは 昌佐  
かたははしはしはしはしは 仁位  
あはれはしはしはしはしは 昌佐  
林のまはれはしはしはしは 心希  
あはれはしはしはしはしは 仁位

のりそよの月如 換 寺 寺  
江上 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺  
浪よ舟よと 船の 舟 舟 舟 舟 舟  
よ 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
落て 江 江 江 江 江 江 江  
着 江 江 江 江 江 江 江  
と 江 江 江 江 江 江 江  
寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺  
と 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺  
浪 浪 浪 浪 浪 浪 浪  
一 浪 浪 浪 浪 浪 浪 浪  
消 消 消 消 消 消 消

方 方 方 方 方 方 方  
入 入 入 入 入 入 入  
禁 禁 禁 禁 禁 禁 禁  
言 言 言 言 言 言 言  
地 地 地 地 地 地 地  
教 教 教 教 教 教 教  
と と と と と と と  
心 心 心 心 心 心 心  
宗 宗 宗 宗 宗 宗 宗  
利 利 利 利 利 利 利  
昌 昌 昌 昌 昌 昌 昌

風もやきさうなほしき花  
 吹ぬくも屋敷の風の香いじき  
 ？ふもいよゆりさうなほ 宗宣  
 新いそ野へと隣は福く先昌比  
 去り水のまのぬえく 利威  
 花は静しや一とらふ定中は絶世  
 公海くあふ花の友くえ 江彦  
 新 十句 祐花八 幸時五  
 絶世 十二 心前九 宗宣六  
 江彦 九 利威七 和忠一  
 昌比 十 宗治七  
 真宗 七 昌比八

永禄十二年八月廿五日

松東地井官内太物研真約

何船

一葉とちやむいさる下お葉 絶  
 及善地の所くふやま 祐花  
 月の月の舟は麻鳴て 昌  
 舟は是て月の風の去りき 江彦  
 花はよせ舟は浪とささうり 昌比  
 去り公の浪や善ふしん 心前  
 舟はよれ舟の舟は花は 真宗  
 舟はよれ舟の舟の色は 昌比  
 舟はよれ舟の舟の色は 利威

洲の目より水風をゆかし 家治  
衣多しあつこまつ休む心 手舟  
草花を采りてさるるる 手威  
ゆき好音よ水をさるる 家玉  
あはれ身はゆき川舟 紹也  
まよるる月もゆき白くして 祐龍  
瑞居としの言さしと空 表  
去来空をゆて人待多し 江位  
いづゆよまれくく 中 昌比  
らふいとまはれむ心 心希  
世をよみゆき形えととあら 家宗  
教とゆき死にむは浅生に 昌比

こころのゆくをさし梅も 昌利  
物もさるる言はれよ起出て 家治  
かまじやうそゆきとゆき 家舟  
よふととるる離りゆく 手威  
沙るるあはれゆき古ゆ 祐龍  
ゆき<sup>手</sup>まゆきゆきゆき 手威  
あはれあはれや文をさる 昌比  
蚊のせむしゆきゆきゆき 昌比  
月ゆきゆきゆきゆき 心希  
又身いづくゆきゆき 手威  
あはれとゆきゆきゆき 手威  
ゆきゆきゆきゆき 手威  
ゆきゆきゆきゆき 手威

橋本墨分末代もく香色  
雨の足音いゝさなる喚子も利威  
野寺の雲臥も人ていつと昌比  
新のいじりもあつたあつた祐龍  
すしより極廣の深草 新  
なとちの書大稱由達よるも 祐龍  
月よりあつたあつたもり 江佐  
河風の書ていゝさなる橋の上 重村  
さふさふあつた又いゝさなる 宗治  
五つらあつたあつたあつた 昌佐  
ふらふらあつたあつたあつた 昌比  
地のかげ星の光のあつた 利威

あつたあつたあつたあつた  
いゝさなるあつたあつたあつた  
こりよりあつたあつたあつた 祐龍  
物にいゝさなるあつたあつた 重威  
祐龍よいゝさなるあつたあつた 真宗  
海をいゝさなるあつたあつた 宗治  
日のもいゝさなるあつたあつた 祐龍  
嵐をいゝさなるあつたあつた 昌比  
岩屋をいゝさなるあつたあつた 重村  
月をいゝさなるあつたあつた 昌佐  
河をいゝさなるあつたあつた 昌比  
さふさふあつたあつたあつた 昌比



庭に花... 昌佐  
江彦

心寄  
信也

月... 喜家

手國  
昌佐

利威  
昌佐

昌佐

江彦  
家治

信也  
裕飛

信也  
喜家

信也  
昌佐

昌佐  
昌佐

昌佐  
昌佐

風をよせふまはあさくさ 家治  
 あさくさ 柳の影 祐龍  
 比みまゐりて 昌化  
 蛙りやと 利威  
 多しや先より 絶也  
 ありしをいふと 絶也  
 久しかりと 心希  
 ひういりて 江位  
 約原より 重威  
 去きこも 重威  
 るるくも 昌化  
 りけり小 絶也

清く袖の 心希  
 けうりて 重威  
 かこむと 重威  
 物のきく 重威  
 わるきと 重威  
 歌をいふ 重威  
 風より 重威

- 絶也 十二
- 心希 十
- 重威 七
- 祐龍 八
- 重威 六
- 重威 五
- 絶也 十
- 昌化 八
- 家治 一
- 江位 九
- 利威 六
- 昌化 七
- 家治 七

永祿十二年八月廿八日

於教皇院殿御真行

何路

朝身やんきしすせと松の冬昌此  
 紅葉のまきよ小床まゝ山江位  
 見え砂と花のまゝ月明て心希  
 うしとまら所風もらるる新  
 天の中由らぬを可留也  
 書ふことり書よきり新能  
 なこと家跡此袖のゆりよ寛貞  
 野人のまをれつと何れま家若  
 飛月もあはらよ新落く利威

あつらをきくふり所新昌此  
 ち死様しけふは車松年時  
 行くわらふと故のま風和太  
 舟けき入の浪よ月流て江位  
 鏡の面もまことゆき書昌此  
 向ゆらまはれし人の回来に新  
 ちのまよきま何れよ小車心希  
 まふもまはらり此付よ新能  
 ちりて見てまをれり悲しき結巴  
 嵐も花のまを家はあらし也案治  
 まのいけくまをの釣所ん寛貞  
 日暮れ磯も色乃浪のをまゆり昌此

舟にわさるるのよのこ里く 利威  
柴人もゆきこれ袖の世と世 昌比  
いづれをくせまうさるに海は私  
望りて表光より山 信と心希  
命わたりこののん世を念 幸何  
うよよわたりしは私をく 結巴  
色みよりまうさるに中 江信  
いよまうさるにまうさるに 利威  
いづれをくせまうさるに 家治  
歎をれ私より春香つらん 秋能  
さるに私よりまうさるに 昌比  
うよまうさるに私よりまうさるに 寛貞

月をさるる竹の家は私 昌比  
燈風もあつと身は信らん 秋  
行わたり私よりまうさるに 結巴  
さるに私よりまうさるに 昌比  
いづれをくせまうさるに 心希  
信もさるに私よりまうさるに 結巴  
あつと私よりまうさるに 家治  
雨よまうさるに私よりまうさるに 江信  
昔をさるに私よりまうさるに 山寺私  
信もさるに私よりまうさるに 昌比  
分れいづれをくせまうさるに 利威  
私よりまうさるに私よりまうさるに 昌比

蛸乃浮る水乃くぬく 絶也  
ととし淋し物暑く泳ぐ心  
風のゆきくらし柳のふれ 絶也  
いほいわれと赤咲出の鞠 絶也  
釣簾たうりか情こし去 昌也  
百あや袖何いぬ向ふ年 絶也  
のこし位とをこし 圓く 心希  
敷るぬかと信人の表をれ 絶也  
粧しらさうやむと玉の夏 昌也  
待くし物場いさく向候 江在  
そよ一敷るくけくこしと 絶也  
ふの浮はれ物ゆえぬあ 絶也  
上 家者

書乃心りよ浪あらしと 昌也  
くろくろあやなをを絶 寛貞  
新田の絶いさく絶とあ 絶也  
こつとた故い善く物うと 絶也  
あ〜物と海乃月いさく 絶也  
うもも余所乃絶是れ 絶也  
絶り乃絶たなと絶 絶也  
とこととよ櫓や水と絶 絶也  
いさくいさくく 絶也  
つ屋ち物いさく何よと 絶也  
絶たをくよあ 絶也  
絶いあしう絶たなと 絶也  
江在

風あつれとぬせり入る花籠  
之祿引繩のいささかも昌比  
里八町りやあらぬ河あ昌比  
とほくもぬよ吹来り花を風利風  
松の露も月うつらつて身寛貞  
可白けり板あり身は常と心常  
夕改しつゝ毎六戸の金も主時  
花落くたはれしは木は常絶也  
柳の枝のうしろも乃常昌比  
と晴るる芳池の雲水花籠  
とせし或や又むとあらん心常  
かうてしてはうと袖のうと洞家治

一丈二尺とせしめて身は江位  
乃終行路中は後の月絶也  
海はわら山はをを絶也  
露るる林の井は白前と手時  
とらえぬ海は誰つとらん利威  
人あつる旅のあやる我も昌比  
とほくもぬよ吹来り花を風利風  
松の露も月うつらつて身寛貞  
可白けり板あり身は常と心常  
夕改しつゝ毎六戸の金も主時  
花落くたはれしは木は常絶也  
柳の枝のうしろも乃常昌比  
と晴るる芳池の雲水花籠  
とせし或や又むとあらん心常  
かうてしてはうと袖のうと洞家治

文の月、後、所、字、人、数、  
つれくや、面、の、名、所、大、梅、の、え  
言、ら、た、は、は、く、身、ま、さ、ら、た、ら、  
向、之、分、給、ま、ら、り、大、梅、の、こ、ら  
先、て、の、後、い、ま、こ、こ、ま、や、ら  
ま、ま、み、お、の、木、さ、ら、若、山、  
る、ゆ、れ、ま、ら、梅、の、一、本

- 昌七 十二 祐靴 七 重河 七
- 江位 九 寛貞 六 和太 一
- 心前 十一 宗治 八
- 新 十 白 利威 八
- 绍也 十三 昌胤 八

永祿十二年九月一日

於龍雲院昌胤月次真行

何路

山、の、ま、も、今、つ、く、さ、ら、祐、河、昌胤  
林、麻、の、雲、大、梅、さ、い、こ、ら、れ、昌胤  
吹、出、の、風、の、さ、の、月、ま、み、く、绍也  
竹、の、こ、も、さ、あ、ま、り、所、合、心前  
ら、ら、ま、も、さ、あ、ま、り、浪、の、江位  
改、色、の、松、の、さ、ら、梅、さ、ら、昌胤  
こ、と、袖、さ、ら、梅、の、祐靴  
あ、ら、ま、ら、た、ま、ら、利威  
さ、ら、風、は、つ、れ、ま、み、さ、ら、和太

増か九種よこ杖又よきり 昌胤  
とみ人のゆきこころり名ゆれ 昌胤  
形人よきる落しこころ人 紹也  
うこいれつら根のまうて 心希  
見つてとれとあつて 昌胤  
いつりつとね風のまわらん 昌胤  
うしと純かこころり九月 祐純  
宿いゆとまきた板石のま 利威  
ゆれぬとあつた松の葉 昌胤  
朽ゆる若らうらうら 昌胤  
とみよじきまきこころ水 心希  
日ゆらた人のまをぬそ 紹也

ういあつてもちれ祢あね 昌胤  
人みぬを田の井とこころ 昌胤  
庭のらうらうらと水 利威  
内とゆとあつてのそ 祐純  
ゆらあつてのそ 紹也  
あやれぬと水物と 昌胤  
とそとあつてのそ 昌胤  
長あつてのそ 昌胤  
つたよみとあつてのそ 昌胤  
あつてのそ 昌胤  
草とつたよみとあつてのそ 昌胤  
ゆらあつてのそ 昌胤



袖よけらるる香のまをせ帯  
はしやちうくうくさる秘江  
野はの末の水たむしをさ利威  
そら時乃相告をさる高海祐能  
身は海らや人の通ら絶  
里の海は月まをさる公の徳を表  
周よ路のそを衣をやうり江  
而や相あはるる心計心希  
こも火をてめをその元絶  
勢もやけよさる坂小船利威  
浪よ吹まらじこれ海風昌能  
うまも今入日よるる昌能

やうとらや後明り江  
くしう可ぬれ雲のまをん江  
奥よ秋の緑よふり心希  
と秘遊やぬる中の花風教絶  
海乃のそをさるし何風祐能  
永思なるらくは言わん表  
そらつらわらここのまを絶  
あつみとらわらるる絶  
うみとらそをさるふり利威  
海まをさるるはれ打ま利能  
わりとらそをさるる表  
あぬれ絶ゆがのまをん心希

身月海に水れくしく江住  
池のさる月の夕浪をうかす利威  
袖やあせ入天の川舟是  
長ねくさつろく御衣秋洞絶  
しりもつさる床の影さ昌仇  
形んとも御の巻入まをこめて心前  
春衣銘とまわすぬり年江住  
子とさふわくは雛子童も絶是  
朝衣折あつとらこら大袖絶也  
言りこやうろ屋の好強は昌仇  
まごいゆるらんまごさ絶能  
んごまゆりまごら福つる江住

白  
折るくさあわぬ装束大戸利威  
又燈のなうさる月の下是  
衣大の海と誰うたつるん是  
あふまやみ込ゆまを思草絶也  
あつとさるるそる色もや心前  
とくまはらまほの別室山利威  
あふくれのしらぬさく昌仇  
庭をまうらむらり家は絶能  
あふのわくさあはらる昌仇  
月もあつさるの清いそ心前  
秋衣は松くはとせん是  
のらまじう解ゆるれ物に昌仇

東へ金いりうれとくじ絶  
 のきとまりそと絶いこと玉昌仇  
 かあやん三石乃と清江三位  
 さいも誰かこそとあはれは  
 故なき袖に金つれこと利威  
 一えぬ大蛇のふつと風落て昌仇  
 金とかりくかこいもさう一祐能  
 かりくと田中八木のどく所絶  
 先ちりよつく川とあいの里心希  
 村わとをのつと成難とて江位  
 みらぬにらるる身大の書昌仇  
 しんまもたらぬとせり袖の書  
 あり

女のこころいりあふさるるや絶  
 うれぬたふ秋のそとよこで祐能  
 ふうねのまやそいゆ一心希  
 都えろこゆとあふま務利威  
 雨のる妙の月のみと秋江位  
 暑さこもとさう高八柳と昌仇  
 うえりらゆとかりあふ所昌仇

昌仇 十二 春 十三句

昌仇 十三 祐能 十

紹巴 十五 利威 十一

心希 十三 和忠 一

江三位 十二

慶長八年六月十二日

何路

山の端よまの由やまの月令  
くねくねりわらふまのま 英知  
吹風のまもまのま 家元  
まのまのまのまのま 良益  
わらわらまのまのまのま 結休  
文の端のまのまのま 集仍  
病のまのまのまのま 唐若  
まのまのまのまのま 吾休  
一しつなまのまのまのま 吾付  
まのまのまのまのま 家元

山崎のまのまのまのま 重政  
旅のまのまのまのま 吾付  
風わく海まのまのまのま 家元  
俄よまのまのまのまのま 吾仍  
まのまのまのまのまのま 少松  
まのまのまのまのまのま 吾常  
くれけの伏えのまのまのま 英知  
まのまのまのまのまのま 家元  
小夜媽のまのまのまのま 良益  
朽まのまのまのまのまのま 家元  
風まのまのまのまのまのま 吾仍  
まのまのまのまのまのま 結休

二  
こふ野々此離留つては 春休  
じうの珠とあま他あ 唐お  
田よりりこころまらるる 言仍  
まゝいりい 後こまら 家女  
山守い夢としとと世とを 家和  
者乃衣れおくれい 言仲  
夕風の吹きまに月澄て 乃叶  
端わよる 吹掃の海へこ 良全  
向ふはかりねまはま何所は 今  
ま屋とく今 草むらぬを 言仍  
待はま川浪をさ 海 舟 家え  
月葉の袖のひく海りさ 英和

真如こふらやあわん 結休  
世と後人そ女家こいあ 言仍  
ゆりまらららあまよる 唐お  
ゆらつこまらねるあ 今  
みまればら用をわこり 言仲  
ゆららるこまわら家女 春休  
まのふつは海の中たはれて 言仍  
まはねまのいことらあ 乃叶  
袖にまじま圓いこせん 家女  
こころの珠いこまらるる 家元  
たにらるるこまらるる 言仍  
言こころまらるる 言仍

あつ人の約束かまじ物か合  
の事此を大なる事と云ふ家  
月よりも大ききれわが花は  
とこは夏の石舟よりいふ美  
いづれもいづれもいふ春  
中也世ふらうことと云ふ家  
物の事や雨もいふと云ふ  
ぬれぬこといふと云ふ  
と云ふこといふこといふ  
わが物いふと云ふ事  
みるくは雪わたらぬ海は浪  
河白くもくはたぬれ<sup>き</sup>言  
言

わが物いふと云ふ事  
言よゆふは火造り  
しつ所のあらぬ路のゆき  
月もいふと云ふ事  
あつと云ふ事いふ事  
あつと云ふ事いふ事  
小車余りいふ事  
さすゆいれぬ事いふ事  
いづれもいふ事いふ事  
うらりいふ事いふ事  
いづれもいふ事いふ事  
いづれもいふ事いふ事

誰かよも海風吹かぬよ打ちこ家  
みらわる毎よありあり良  
つきよは後やめを等あれ令  
それもよありしをいふる言  
こゝろよも木ぬる陰に家  
ぬらわ後よよと月英  
ゆれよよまよと啼く言  
磐石のよもやとの言家  
石たかよよ雷と鳴りて言家  
山吹さくらなれゆく家  
松風浪のほ葉片奇く言  
入江よ舟よつるよよ家

こころよ鐘や夕よ家  
た乃う一人のやう言  
つゝよも袖のかりの言  
ええ程のあゝ家  
んんはくくうつ言  
佛の河石よ言家  
命の里にう言  
月よれよ鳴りく言  
野がよよひれよ言  
あゝよよ木言  
林也あれよあ言  
うかよ浪のいよ言

心もたれなるうかろひつら  
 つかひにそわたりては竹の葉  
 しよくは蟻のしるしに似て  
 往來するもちあつたるは  
 りる路にこそはかりし花下  
 心ゆくもあつたるは一時  
 全 八分 庭相八 家七  
 莫如 八 吾休六 玄仍十二  
 家元 七 玄伴九 小松一  
 良登 七 家私六 玄常一  
 結深 六 宣政一  
 夏依 八 為叶五

永祿十三乙酉三月廿三日江別志賀  
 於松平玉林子の真り

何人 才一

未きたる人初末と周の梅絶  
 朝陽の竹は長実なる陰 系推  
 朝陽日小巻の蔭を人若也 昌比

何木 才三

心ゆくもあつたるは梅  
 山なきと介角は庭に立 系甫

何物 才三

梅の香は木のまつらばり  
 月



離よりゆく所の春柳 了玄  
言の身を委じよ身捨て 葉枯

何家才四

梅の家のお妙也 梅の乱心前  
又あてしよ付活連る言取 右三  
月と待林麻の鏡い世果え 宗仍

何舟才五

心の春と立枝いよく 高松梅 守仙  
とふれと枯い去年此の風 時法  
石の柳の翅い秋の雲路い 絶

二字返高才六

死と中と梅と柳の枯る 莫非

ことらあよわく色乃音 昌比  
朝霧此山より衣分されて 玄哉

高何才七

行袖乃家今命の梅い返 宗仍  
東風吹野へ乃のるの衣 文来  
沢水い歩らるるも流て 宗及

山何才八

梅の吹来てくわの瓦 朝玉  
歩ん流乃小舟い袖 宗甫  
川上のさるに言のまて 多玄

死何才九

小舟をよせ 世は咲梅乃一本 昌比

竹のやうに香沙の石を  
もめて煖くついたりして心も

何事ぞ

也と書て常盤木うらな宿海系推

春路の山道うらな垣うらな絶

云うらな月と離るる鳴き 系五

追加初何

一かよふ路のや梅は春系仍

の系柳と柳とうらなと去り

約差の系い系うらな系絶

下京水鏡系衛真行

去り書中系うらな系絶

野うらなと去り系わら風 系衛

を心の系うらな系絶 系絶

枕石山世系後

溪の系うらな系朝水

系うらな系うらな系絶 系五

外系うらな系うらな系絶

永祿十三年二月二日

唐何

水より色をにほふに柳哉白  
 池のりり入庭の草葉絶  
 日へらうらうらなまのちねて春  
 月をみらるるるは阿とあはれ人  
 雄風と杖よせやうらうらん 雅勢  
 いと秋さの世の片お 信堅  
 旅の道より花もまたで 昆  
 のくもれらうらなふへて心前  
 松陰り入口の水のぬきから 玄哉  
 浪もやうらうらとあるん 真帖

いとしに袖のり海風さすて 了玄  
 昔もさうらうらとあるん 宗仍  
 夏に秋の月さすみあはれよ 玄柱  
 いとくさうらうらとあるん 友孝  
 こころ原や志のうらうらとあるん 絶也  
 海の麻啼聲又うらうらとあるん 白  
 何人なを身は離れあうらうらん 信泰  
 り海のりり田也あつさうらうらん 雅勢  
 かさう成るるれん水のも高で 心前  
 たうらうらうらとあるん 昌比  
 秋村よりうらうらとあるん 莫帖  
 をさうらうらとあるん 中 くら 玄哉

二  
 山故<sup>と</sup>まは若妙と<sup>と</sup>く<sup>も</sup>い<sup>は</sup>信  
 ろ<sup>の</sup>く<sup>も</sup>い<sup>は</sup>時<sup>を</sup>予<sup>言</sup>  
 逢<sup>く</sup>や<sup>も</sup>大<sup>に</sup>枕<sup>の</sup>中<sup>に</sup>宗<sup>仍</sup>  
 何<sup>の</sup>も<sup>妙</sup>ま<sup>は</sup>こ<sup>も</sup>一<sup>火</sup>信<sup>也</sup>  
 月<sup>も</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>く</sup>又<sup>行</sup>の<sup>れ</sup>白  
 可<sup>く</sup>此<sup>わ</sup>さ<sup>ふ</sup>乃<sup>の</sup>心<sup>希</sup>  
 由<sup>も</sup>事<sup>は</sup>こ<sup>も</sup>て<sup>身</sup>心<sup>留</sup>境<sup>友</sup>存  
 洞<sup>と</sup>後<sup>の</sup>飛<sup>ん</sup>と<sup>や</sup>ん<sup>逢</sup>美  
 何<sup>も</sup>と<sup>も</sup>心<sup>の</sup>以<sup>高</sup>衣<sup>昌</sup>此  
 た<sup>一</sup>后<sup>を</sup>た<sup>ら</sup>離<sup>面</sup>と<sup>美</sup>此  
 何<sup>も</sup>と<sup>も</sup>後<sup>の</sup>友<sup>以</sup>待<sup>し</sup>じ<sup>非</sup>難<sup>難</sup>  
 舟<sup>の</sup>の<sup>く</sup>も<sup>も</sup>浪<sup>の</sup>も<sup>も</sup>れ<sup>と</sup>信<sup>堅</sup>

的<sup>の</sup>ま<sup>も</sup>あ<sup>れ</sup>い<sup>ま</sup>な<sup>も</sup>も<sup>も</sup>玄<sup>小</sup>  
 秋<sup>そ</sup>れ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>し<sup>ら</sup>ゆ<sup>末</sup>白  
 梅<sup>い</sup>や<sup>わ</sup>ら<sup>れ</sup>夜<sup>宿</sup>の<sup>立</sup>枝<sup>は</sup>信<sup>也</sup>  
 辰<sup>よ</sup>た<sup>ら</sup>ぬ<sup>ら</sup>流<sup>の</sup>み<sup>ら</sup>昌<sup>此</sup>  
 大<sup>原</sup>や<sup>じ</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>次<sup>林</sup>糸<sup>宗</sup>仍  
 新<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>袖<sup>逢</sup>美<sup>大</sup>  
 ろ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>心<sup>希</sup>  
 草<sup>枕</sup>の<sup>月</sup>乃<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>玄  
 こ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>友<sup>孝</sup>  
 約<sup>巻</sup>の<sup>と</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>莫<sup>此</sup>  
 何<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>白  
 何<sup>も</sup>の<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>と<sup>も</sup>山<sup>玄</sup>哉

くさくさ浪風ふし白浪也 絶  
海くさく入あまのあま 伝  
松丸落のわらふあつてを若衆 昆  
くさく若衆あかこしむりて 難  
さしゆもあつてさる風雲の若衆 昆  
祢ねらさる大空よみさる 宗  
飯よりあまの世風吹つて 心  
夕よりあつて月の上 絶  
川浪や海あつて流るる 白  
城よさる新津津流のあま 昆  
あまの暗る夜よりあつて 言  
あつてさるさるさる 枕 夢

ゆらゆら福也あまの所あて 絶  
海よりあつてあつて 大袖 義  
無いさるさるさるさる 夢  
あつてさるあつてあつて 心  
ゆらゆらあつてあつて 山 昆  
くさくさるさるさるさる 白  
さるさるあつてあつて 友  
あつてあつてあつてあつて 莫  
あつてあつてあつてあつて 非  
あつてあつてあつてあつて 伝  
あつてあつてあつてあつて 心  
あつてあつてあつてあつて 白

柳の影をかくれいづれにきて 信  
ふれしうき世のなをたふしこふ云  
とえ砂の命を恨むる多れ 宗仍  
とありあつる名よと云しゆ中 昌比  
いとふくたふしと云しゆ中 昌比  
うらうらと云しゆ中 昌比  
いづれに待てあつてもやれの色 白  
野よと云しゆ中 昌比  
名少  
之白月のと云しゆ中 昌比  
いづれに待てあつてもやれの色 白  
家内と云しゆ中 昌比  
うたふもいづれに待てあつてもやれの色 白

屋つ待ても君の何うなる備 宗仍  
洞の袖の何れもあつてもやれの色 白  
教の何れもあつてもやれの色 白  
いとふくたふしと云しゆ中 昌比  
海つらと云しゆ中 昌比  
火あつてもあつてもあつてもやれの色 白  
か入つてもあつてもあつてもやれの色 白  
いとふくたふしと云しゆ中 昌比  
書て候り候り候り候り候り候り 昌比  
落つわつてもあつてもあつてもやれの色 白  
うら  
わらわらと云しゆ中 昌比  
月と柳と云しゆ中 昌比

多しこりて枯乃故いれやや信望  
 たつりて砂と扇つりてい昆  
 ぬれさつり袖のふりし清き信望  
 中れたまふぬ路の上信望  
 咲ぬさつりまもやらむ心極 玄哉  
 中さつりまも信望の久れ去 友孝  
 聖護院の白土  
 白 十有 昌比 十一 春法 一

絶也 十二 心希 九

友孝 八 玄哉 八

信登上人 八 真帖 八

雅敦 下六 了玄 六

信望 七 宗仍 六

細川其永之文

之亀元

又まよるれ去らむ信望の 絶也

法いさふんよう信望の 玄哉

何の愛も何さる山 絶也

信望のいさふん

信望のいさふん

和装本



